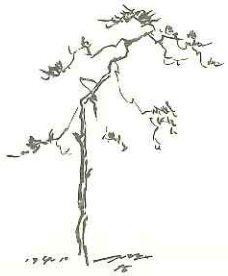
■真宗ブックレット4

エイズという時代



有無をはなるとのべたまう　玉光順正　3
エイズという時代　梶原敬一　9
病気以上の〈病気〉　藤場俊基　18
積極的（ポジティブ）人生は我慢なんかしない　平野広朗　31
AIDSとは助け合う力　五島真理為　36
エイズとらい ―隠喩（メタファー）としての病い　島　比呂志　41
エイズを考える　今井由三代　47
生かし合う力　森崎和江　53
インタビュー
病気を治すことより病気を信ずる道がある　聞き手　梶原敬一　58
エイズ感染者が安心して語れる状況づくりを　聞き手　大石敏寛　玉光順正　72

表紙絵・装丁・イラスト／鄭　光均

有無をはなるとのべたまう

玉光順正
（光明寺住職）

老病死を受けとめる

人生のありようを苦だと説くことは仏陀の教える基本である。そしてその苦を四苦と説き、生老病死を数える。つまり、人間が生存する限りさけられないものとして、生まれること、老いること、病むこと、死ぬことがあるわけである。いいかえれば、生老病死こそが人間の状態であるといえるだろう。にもかかわらずというべきか、私たちは生を喜びこそすれ、老、病、死はさけたいこととして考えてしまっている。人間の状態として、老、病、死を受けとめることこそが仏教の課題であるともいえる。

スーザン・ソンタグは「最も健康に病気になるには」（隠喩としての病）という。それは私たちの社会が、健康に老い、健康に病み、健康に死ぬことが困難な社会であることを示している。事実、私たちは、老、病、死をなかなか普通の状態としては受けとめられない。

エイズへの偏見と差別はどこからくるか

エイズという病が発見されたのが一九八一年。今では最も健康に病気になれない病となってしまっている。いいかえれば、最も偏見と差別に満ちあふれた病気となっているということである。その偏見と差別は一体どこから生み出されてくるのだろう。多くの人々によっていくつものことがあげられているが、私もその中のいくつかを考えてみたい。

まず、現在のところ決定的な治療法がないということ、つまり、医学上の不治の病ということからくる恐怖感である。かつて癩（ハンセン病）がそうであった。エイズ撲滅などということがいわれるのは、かつて癩撲滅・祖国浄化などといわれたことと全く同じである。エイズウイルスが人間とは別にどこかにひそんでいるというのではない。エイズは必ずそれぞれが人格をもった病む人々としてあるのである。エイズ撲滅とは、癩撲滅がかつてそうであったように、人間の撲滅に他ならない。同じ誤ちを繰り返してはならない。

次には、エイズは私たち自身が感染する病気であるにもかかわらず、外からきた病気、まさにエイリアン（侵略者）のように考えられていることである。石田吉明さんは「今の時代を覆っているのは、一種の潔癖思想とでもいうべきものだろうか」（『いのちの輝き』岩波書店）といわれる。日本社会の閉鎖性、排他性は既にいろいろと指

摘されている。何らかの理由をつけて異質なもの、少数者を排除していくということはいわば日常的なことなのである。エイズは日本社会に他国から侵入してきたエイリアンだというわけである。エイズと闘うためには、私たちは今、エイズという時代を、エイズを病む人々と共に生きているのだという現実を正しく知ることからしかはじまらないだろう。

性に関する病としてのエイズ

ところで、現代日本においては、海外から「日本型エイズ」と呼ばれている現象がある。それは血友病患者の治療のために使用した血液製剤がエイズウイルスに汚染されていたことによる薬害としてのエイズ感染者、患者の割合が他国に較べて異常に多いのである。このことは日本という国家における、国家と企業の癒着、そして責任、医療における倫理、そして責任等、いろいろな考えなければならないことを私たちにつきつけている。この「日本型エイズ」を病む人々と想いを重ねることは、国を問う眼、国家を相対化するということを可能にさせる眼を育てることになるに違いない。

さて、次に日本においても今後はおそらく他の国々と同様、性行為による感染者、患者がふえてくるものと予想されている。それは性に関する病だということが、今以上に強調されるだろう。一九八一年、最初の認定エイズ患者が同性愛者であったことから、日本でもそれは同性愛者の病気だと考えられたりもした。そのことは、キリス

ト教国のように宗教的に同性愛が禁じられているというわけでもないが、絶対多数の異性愛者にとっては、それはやはり特異な眼で見られる病気であった。そしてそれが異性愛者にも成り立つ病だということがはっきりしてきた時、今度はエイズ予防法という悪法まで生み出した。その第七条（医師の通報）には「その診断に係る感染者が指示に従わず、かつ、多数の者にエイズの病原体を感染させるおそれがあると認める時」等とある。それは風俗営業といわれるものがエイズの発信地であると考えられたり、又「普通の性生活」をしておれば安全であると関係者が呼びかけたりしていることとつながっている。

これらの背景にはエイズそのものを病気としてみるよりも、それ以外の要素が見えかくれしているようだ。「血友病で感染した人は気の毒だが、同性愛や麻薬のまわし打ち、そして風俗営業での売買春行為で感染した人は自業自得だ」等といわれることがあるようだ。そしてこのような感覚が又、エイズそのものを単なる病気ではなく、不道徳な病気だと考えさせ、より差別と偏見の原因ともしているのである。「自業自得」という言葉は、誠に便利なそして冷酷な言葉である。

ところで、『歎異抄』には「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり。そのゆえは、如来の御こころによしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめ云々」とある。又『浄土和讃』では「有無をはなるとのべたまう」とある。これらの言葉は、私たちが日常何よりもの拠り所としている善悪という概念を否定した言葉である。もっといえば、倫理とか道徳といわれるものを否定したことばだといっていいかもしれない。いいかえれば、善悪という概念こそ私たちが、他人を正当に差別し偏見をもつ手段としているといっていいのではないだろうか。

エイズに関しても私たちは、人間であることよりも前に善悪の概念をたててしまう。あれはＢａｄエイズ、これはＧｏｏｄエイズだと。そのことこそが、病気以上の意味をもつ病気だということでもある。

石田吉明さんは『ぼくは「血友病と、その他のエイズ患者を一緒にしてもらったら困る」などと考えたことは一度もない。心の底から訴えているのは「エイズ患者を好奇の目で見ないで、患者として、つまり人間として扱ってほしい」ということである。厚生省は、ふたこと目には「エイズ撲滅！」といっているが、エイズ患者は罪人でもなんでもない。〈撲滅〉の対象でもない。ごく当たり前の生きた人間なのである。ここの視点をはっきりさせないと、あるべき医療も生み出せないし、エイズと共生していくことなど、到底できないだろう』（『いのちの輝き』）といっている。

善悪の固執を課題とする

エイズ患者を「好奇の目」で見ている私たちにとって、エイズという時代を生きる、エイズと共生していく社会を構成するためには、何よりも私たちのもっている根源的固執ともいうべき善悪の固執を課題とすることが必要なのではないだろうか。

最後に、今回私はこのブックレットの企画で、大石敏寛さんに出会った。彼は昨年八月横浜で開かれた第十回国際エイズ会議の開会式で「患者・感染者の方は立ち上がってください」と呼びかけたエイズ感染者であり同性愛者である。その呼びかけに、会場からは二〇〇人以上の患者・感染者の人々が応じたという。彼は又このようにいっている。「自分自身をありのまま受け入れることが重要なんです。自分自身を受け入れるというのはエイズを含めて受け入れることです。自分自身を受け入れないと前へ進めないのです」と。日本ではエイズであることをカミングアウト（公表）して生きる人々はまだ少ない。いうまでもなくそれはエイズという病気を偏見と差別に満ちあふれた病気にしてしまっている日本社会では当然のことといえるだろう。しかし、今回の大石さんの呼びかけと、それに呼応した人々の動きは、確実にエイズという時代をエイズと共に生きようとしている人々が増えてきたことを示しているようである。

人間にとって、エイズという時代とは、という問いに、身をもって応えつづけようとされるこれらの人々の愛の呼びかけに、今私たちも応えなければと思う。

エイズという時代

梶原敬一
（国立姫路病院医師）

エイズを私達の生き方の問題として考える

一九八一年。アメリカで、カリニ肺炎とカポジ肉腫といういずれも稀な病気の多発が報じられました。そして、それがエイズ（後天性免疫不全症候群）という新しい疾患であることが次第に明らかにされてまいりました。しかし、この病気が徐々に進行し、終（つい）には死に至るものであるらしいことが判明するにしたがって、この病気に対する恐怖心もまた、この病気とともに世界中に広まってまいりました。さらに、この病気が性的接触を媒介とした感染症の側面を持つことから、新たな性病として、差別と偏見も同時に拡がってまいりました。

エイズを病む人達にとって、この十余年は病気そのもの以上に、この差別と偏見に苦しめられたものだったことは、多くの人達が自らの体験で明らかにされております。

しかし、一方でこの差別や偏見を超えて、人間が人間として生きるとは何かを、こ